

# 若者の携帯電話利用とライフステージ

—2005年インタビュー調査と2008年追跡調査—

小寺 敦之

## 1. はじめに

携帯電話が本格的な普及を始めた1990年代半ば以降、携帯電話と若者の対人関係との関連性をめぐって様々な議論が繰り返されてきた。その主な潮流は、携帯電話利用によって対人関係が希薄化するという社会的影響論、あるいは携帯電話が現代的な若者の性向と一致するメディアであるという若者論的議論であった (e.g., 浅野, 1999; 富田, 1997; 辻, 1999)。

同時に、前者に関しては、「仲間とのコミュニケーションを一層緊密化」させる役割がある (吉井, 1997)、「閉鎖的な仲間内コミュニケーションを強化する」(橋元, 1999)、「既存の人間関係を別のコミュニケーションチャンネルを通して補強する役割を果たしている」(田村, 1998)といった逆の側面が実証的調査結果をもとに示され、後者についても言説のモデルとなった事象に一般性を欠くという問題が批判されるなど (e.g., 新井ら, 1993; 橋元, 1998)、メディアと若者とを結び付ける議論自体には合理的な根拠や一般性は存在しない点が明らかにされてきた。つまり、携帯電話と若者の対人関係をめぐる十年間の研究は、両者のネガティブな結び付きを主張する言説とそれに異議を示す取り組みの応酬であったと振り返ることができる。

しかし、これら一連の対抗的議論には、方向性の違いはあれ一面的な結論に偏る傾向があったという点も指摘できよう。つまり、社会的影響論が対人関係の悪化を嘆けば、実証的調査は対人関係の強化を主張するというように、携帯電話と対人関係に対する関心はマルかバツかという議論に終始しており、具体的なコンテキストにおける利用実態を探ろうという姿勢が見られなかったというわけである。言い換えれば、現代に至るまでに行われた携帯電話と対人関係についての調査研究の多くは、広く現象を見て生み出された仮説というよりも既存の若者論をもとに導出された仮説の枠から脱していない

小寺 敦之

感がある。斎藤（2005）が「人間関係が活性化されるか希薄化するかという二元論では現実は捉えられない」と述べ、辻（2003）が「選択的關係論」（松田，2000）に対して「実態把握を通して十二分に深められているとは言いがたい」と批判した状況は現在でも克服されていないと思われるのである。携帯電話を介して行われるコミュニケーションの意味や役割について洞察していくためには、誰とコミュニケーションを行うか、どのようなコミュニケーションを行うのかという具体的な側面を理解することが必要であり、この視点をもとに携帯電話利用と対人関係との関連性を考察することが必要だと考えられる。

以上の問題意識から、筆者は2005年に携帯電話と対人関係の構築に関する一連の調査研究を行い、博士論文「携帯電話利用の社会的・心理的背景に関する研究―質的アプローチによる『利用と満足研究』の試み」としてまとめた（小寺，2007a）。だが、同論文は数量化調査では捉えることのできない携帯電話利用のダイナミズムを描き出した点では一定の成果があったものの、「学生時代の携帯電話利用」という枠を超えて論じるには不十分なものであった。携帯電話の利用スタイルや対人関係における位置付けについては、それ以降のライフサイクルを含めて捉えていく必要があると思われる。

そこで、2005年調査から4年近くが経過した2008年後半に、簡単な追跡調査を行うこととした。本稿は、その結果をもとに、ライフステージの変化が大学生の携帯電話利用にどのような変化をもたらすかについて考察するものであり、若者の携帯電話利用を調査する意義と限界について検討するものである。

## 2. 携帯電話と対人関係をめぐるインタビュー調査―2005年調査の要約―

追跡調査の報告に入る前に、まず2005年調査での知見をまとめ、追調査での検討課題を明らかにしておきたい<sup>(1)</sup>。

2005年調査は、携帯電話の「剥奪実験調査」（小寺，2007a，2007b）から導き出された研究課題への取り組みであった。9名の被験者に2週間の携帯電話非利用状況を課した「剥奪実験調査」は、人々の携帯電話利用実態を、ボトムアップ式に、かつバイアスを低減させた状態で得るために企図したも

---

(1) 2005年調査の要約は、日本マス・コミュニケーション学会2008年度春期大会（中京大学）にて発表した。調査の全容については小寺（2007a）を参照。

のであった。同調査では、剥奪実験ならではの示唆に富むデータが多く得られたわけだが、とりわけその「情緒的コミュニケーション（おしゃべりとしての携帯電話利用）」に関する発見は興味深いものであった。すなわち、携帯電話非所有の状況において、被験者は「つながってる感<sup>(2)</sup>」の枯渇から生じる疎外感・孤立感を訴えたと同時に、自身を取り巻く煩わしい対人関係からの解放感というポジティブな感情をも示したのである。さらに、被験者の対人関係には強化と乖離の両極が現れた。以下は、実験期間中のインタビューコメントの抜粋である（被験者は仮名）。

友だちがメールしてると、「何かいいな」って思うようになってきた。楽しそうだもん…だって、今一緒にいない人ともしゃべれるから。つながってる感がある。…独りじゃない感じがする。(アヤ)

コミュニケーションができないじゃん。だって人と断ち切れちゃったってことじゃん。…(携帯があれば)連絡できるし。連絡が来なければ自分から発信できる。私、両方から遮断されちゃってるわけじゃないですか。発信もできない、受けられない。つまんない。(ユウコ)

「面倒がなくていいや」ぐらいの解放された気持ちというか。…些末って言ったらあれですけど、煩わされなくていいって言うか。…携帯持ってることで、どうでもいいメールとかが来るのがすごいざかたりすることもあるので。…携帯をいじるってことは、絶対にどこかで誰かとつながってなきゃいけないわけで。…私の中の人間関係の順位みたいなものがありまして、その高い方としか付き合わなくなりますね。(ミサキ)

あんまり普段、そこまでつながってない、仲いいんだけど会う機会がない人とは、よほど会わなくなってくるかな。だから、逆に彼氏とか、しょっちゅう顔合わせてる人は、ずっと一緒にいたりとか。(リョウコ)

前より彼女を大事にするようになった気が。…メールだけで普段やり取りしてるような子たちとは、結構疎遠になってるはずだと思います。(カズヤ)

---

(2) 多くの被験者が語った用語であり、心理的なつながりについての主観的感覚を指す。

小寺 敦之

携帯電話のない状況が顕在化させたものは、対人関係の区別であった。つまり、携帯電話を通じて結合を求めたい相手と、それを回避したい相手が彼らの中で区分されているのであり、結合を求める相手に対しては疎外感を、回避したい相手に対しては解放感を経験したと考えられるのである。実際に、携帯電話がない状況では、前者との関係性は、パソコンメール、公衆電話や自宅電話、あるいは直接会う回数の増加といった代替行動により強化され、後者との関係性はそれまで関係性を維持してきた携帯電話の欠落により急激に失われていった。

ここで観察された携帯電話の「情緒的コミュニケーション」は、「道具的コミュニケーション（事務連絡や待ち合わせとしての利用）」と異なり、対人関係を考える上で重要な機能であると推察された。そこで、この「情緒的コミュニケーション」に注目したインタビュー調査を行い、若者の携帯電話利用と対人関係の実態を描き出すこととしたのである。

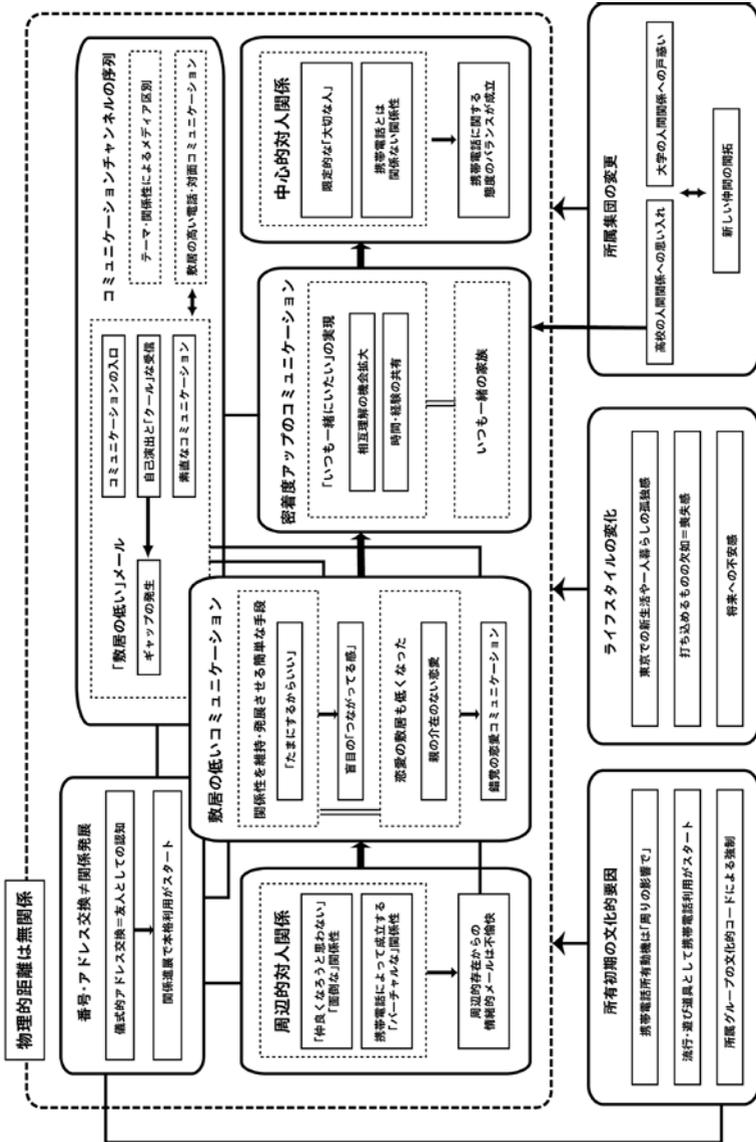
## 調査方法

携帯電話と対人関係を取り巻く営みについて、上記調査に参加した被験者9名に10回程度（1回あたり10分～40分）に及ぶインタビューを行った。これは信頼関係が形成されていた被験者にインタビューすることで、多くの話題を積極的に語ってもらえたという有効性があった。「情緒的コミュニケーション」は、私的な関係性や話題に関わるため、その内容がプライベートな話題が多くなることは十分に予想されたが、被験者は調査者の予想以上に自身のプライベートに関する情報を積極的に語るようになっており、本調査のデータ収集は概ね順調に行われた。

インタビューでは、携帯電話の「情緒的コミュニケーション」を取り巻く対人関係はどのような基準で区別されているのかという先述の発見を出発点として、その関係性の成り立ち、日常生活、ライフヒストリーとの関連性など、被験者の携帯電話利用経験を様々な角度から問うた。回数を重ねるに従って被験者からも積極的に関連情報が提示されるようになり、それを新たな議題としてインタビューを進めていくことができた。また、ある被験者から示された事例を他の被験者への議題とするなどの工夫を行い、可能な限り広く被験者の経験を取り込んだ。

面接は全て調査者自身が一人で行い、面接内容は被験者の同意を得て音声

Fig.1 携帯電話の「情緒的コミュニケーション」の社会的・心理的背景 (調査結果)



小寺 敦之

を全てICレコーダーに録音した。また、面接外での被験者の意見は調査開始時に渡した日記に自由記入してもらった。調査者は、被験者の話題を多く引き出すことに努め、被験者の語りに対する補助的役割を担うものと位置付けた。

インタビューと日記のデータはKJ法を用いて整理・図式化した。すなわち、(1) 被験者が語った関連エピソードを全てカードに書き出した。(2) そのカード(468枚)の整理・統合を行った。(3) それらをグループ化してコメント群の要約となる上位テーマを設けた。(4) 各テーマを空間配置すると同時に、適切な上位概念を設けてカテゴリ化した。(5) 上位概念との関連付けや配置の修正を行い、図式化に至った(Fig.1)。

## 調査結果

以上の手続きでデータを整理・図式化すると、大学生の携帯電話利用スタイルの諸相が、彼らの対人関係の展開と連動している状況を見出すことができた。

携帯電話の「情緒的コミュニケーション」をめぐる対人関係は、積み重ねが薄く、関係性の進展が志向されない「**周辺の対人関係**」と、相互作用を積み重ねて親密な関係を築き、かつその関係性を今後も積極的に維持・展開していこうという志向性を持つ「**中心的対人関係**」に大別できる。もちろん、対人関係において「**周辺の**」「**中心的**」という関係性が示されるのは結果的なものではあるが、「**周辺の対人関係**」とのコミュニケーションを回避したいものとする感覚が生じるのは、「**周辺の対人関係**」とのコミュニケーションが実際に試みられているということに他ならない。つまり、携帯電話は「**周辺の対人関係**」からの容易なコンタクトを可能にするまで「**敷居の低いコミュニケーション**」を実現しているというわけである。そして、これが対人関係における携帯電話の大きな役割になっていると思われる。

「**周辺の対人関係**」を「**中心的対人関係**」へと押し上げていこうとする肯定的な志向性が存在する場合には、「**敷居の低いコミュニケーション**」は、関係形成の最初のステップとして有効な手段を提供する。それは、一方では、対人関係の親密化を支援する役割を持ち、恋愛アプローチに際しても有効な戦略にもなり得る。その大きな助力となっているのが、容易な「**番号・アドレス交換**」である。これは、いつでも相手にコンタクトを図ることができる

状態が用意されることを意味するのであり、「敷居の低いコミュニケーション」の前提条件を整える名刺交換的な役割を担う。もちろん、それが即座に「敷居の低いコミュニケーション」の展開に直結するわけではないが、関係構築の開始を促されたときには、その展開は極端に容易なものとなる。

同時に、「敷居の低いコミュニケーション」は、低コストで多くの「情緒的コミュニケーション」のやり取りを可能にするため、「つながってる感」を経験する機会をも増大させることになる。そして、携帯電話によって手軽に得られるポジティブな刺激は容易に強化される。その結果、今度は「つながってる感」がないと不安な状態が容易に生み出されていくのである。また、盲目的・錯覚的なコミュニケーションを生じさせる危険性を秘めていることも忘れてはならない。恋愛関係への過度の期待が生じたり、過去の恋愛への未練が残ることは不自然なものではないが、その感情を実際の行動に転化させることができるのは、目の前に「敷居の低いコミュニケーション」を実現する道具があるからという側面が大きいと思われるのである。

さらに、彼らは明確な「コミュニケーションチャンネルの序列」も意識している。例えば、携帯メールでのやり取りは、一方では「敷居の低いコミュニケーション」による初期的な対人関係の成立・発展に貢献するが、他方では電話や対面コミュニケーションで得られるようリアルで同期的な交流とはかけ離れたものになる。演出されたメールの送受信によって誤解が生じることもあり、正確なコミュニケーションの実現を妨げることにもなる。したがって、相手との関係性がある程度成熟してくると、お互いの「情緒的コミュニケーション」は、相手との関係性をより深化させ、親密なものとするのできるメディアを介したものと広げていく必要が生まれてくるのである。これらのチャンネル序列は、距離・時間の制約だけでなく、心理的コスト、経済的コストなどの函数に従って順序付けられている可能性が高い。メールによる告白行動も現代的なコミュニケーションの風景であるが、そこにある心理的コストとのせめぎ合いは決して現代に特有の現象ではない。携帯電話は、対人関係や恋愛関係の親密化プロセスに新たな選択肢を提供していると見るのできるのである。

対人関係の親密化が進展すると、携帯電話による「情緒的コミュニケーション」は、「敷居の低いコミュニケーション」から更なる関係性の親密化を求める「密着度アップのコミュニケーション」へと意味を変容させていく。

心理的プレッシャーを軽減させる役割を果たす「敷居の低いコミュニケーション」とは異なり、「密着度アップのコミュニケーション」では、携帯電話が対面コミュニケーションの代替行動として用いられる。ここでは、双方からの積極的な自己開示が図られ、相互理解の機会を増大させているようである。こうした利用スタイルは、初期段階に見られるような関係性の成立・発展を目的としたものではなく、より一体的な関係を目指したものだと考えられる。

さらに、「中心的対人関係」に近付き、お互いのライフスタイルに対する理解や価値観の共有が行われると、携帯電話の利用スタイルについても合意形成が行われる。「中心的対人関係」における携帯電話の利用スタイルは多様なものとなり、両者にとって最もバランスの取れた使い方へと収束していくのである。つまり、携帯電話による「情緒的コミュニケーション」の量が対人関係や恋愛関係の質を規定するのではなく、対人関係・恋愛関係が成熟すれば、最も双方にとって快適な「情緒的コミュニケーション」の量が自ずと定められていく。携帯電話利用のバランスに多様性が生じるのは、当事者たちの置かれている社会的状況や対人コミュニケーションに対する志向性などに要因があると考えられるが、お互いの合意がひとつの利用スタイルを生み出していくという点では、いずれのパターンも同じ構造の上に成り立っていると考えられるのである。

携帯電話による「情緒的コミュニケーション」の多様性は、携帯電話がどのような関係性をもたらすかというよりも、対人関係や恋愛関係における相手への志向性が携帯電話に何をさせるかという観点から読み解くことが適切であろう。携帯電話利用が新たなコミュニケーションの風景を生み出していることは事実であるが、その背景には、普遍的な対人関係や恋愛関係の親密化プロセスを見ることができる。また、こうした心理的背景に作用すると思われる社会的要因がいくつか存在することも指摘できる。今回の調査では、「所有初期の文化的要因」「ライフスタイルの変化」「所属集団の変更」という社会的背景に関する3つのカテゴリーが見出されたが、そのいずれもが対人関係の展開に影響を及ぼす要因になりえるのだと推察された。

### 3. 追跡調査－2008年調査－

2005年調査では、携帯電話の機能的側面の中でも大学生に重視されている

「情緒的コミュニケーション」に注目して、その背景にある対人関係の親密化プロセスの存在を描き出した。そして、対人関係や恋愛関係の各段階における諸々の制約の解放によってコミュニケーションの風景は変化したものの、携帯電話利用の中には対人コミュニケーションの普遍性を認めることができると結論付けた。

ここから、追跡調査におけるリサーチクエッションが見出せよう。ひとつは、(1) 携帯電話による「情緒的コミュニケーション」は学生時代を終えても携帯電話利用の主要な機能であり続けているのかという根本的な疑問である。学生時代の終焉に伴い携帯電話利用のスタイルそのものに大きな変化が生じているのであれば、携帯電話利用に関する調査研究にライフステージという新たな変数を組み込む必要性が出てくる。

さらに、(2) 携帯電話の「情緒的コミュニケーション」の背景に対人関係の親密化プロセスが存在するという仮説は、ライフステージの変化にかかわらず有効であろうかということも調べていく必要がある。これは普遍的現象であると考察した2005年調査の検証でもあり、携帯電話が日本のコミュニケーション環境でどのような役割を担っているのかという観点からも重要な問いになり得ると思われる。

以下は、調査に参加してくれた被験者と携帯電話との関わり方についての近況報告である。全員の消息をつかむには至らなかったが、面接およびメールでのやり取りが実現した被験者は、就職・進学・留学など、様々な経験を経て現在に至っていた。

### (1) 「道具的コミュニケーション」へのシフト

新たなライフステージへと進んだ彼らの報告によれば、携帯電話利用における最も特徴的な変化は「情緒的コミュニケーション」から「道具的コミュニケーション」へのシフトにあると言えそうである。

もちろん、携帯電話利用自体が減少しているということはない。「仕事で使うことが多くなった」ため、利用料金が上昇するケースも報告されている。しかし、仕事での携帯電話利用は「プライベートな内容はほとんどなく事務連絡が多い」「連絡があっても仕事の内容」であり、進学して大学院に在籍する被験者も「(学部時代より) 連絡手段としての利用が多くなっている」という。つまり、「情緒的コミュニケーション」の減少だけでなく「道具的

小寺 敦之

コミュニケーション」の増加が、このシフトの背景にあると推察されるのである。

「情緒的コミュニケーション」の減少については、「メールが極端に減った」ことが大きな原因だという。2005年調査でも明らかにしたように、メールは「情緒的コミュニケーション」を支える重要な要素であった。ある被験者が「1日1回以上はメールしていたし、着信メールはすぐに返信していた」のが常であったと振り返ったように、学生時代の携帯電話利用では、メールによる「情緒的コミュニケーション」がかなりの部分を占めていた節がある。しかし、彼らの報告によれば、これらのやり取りは卒業後に急激に減少していったのだという。ある被験者は、メールへのこだわりがなくなったことに伴って「i-phoneへの乗換えを考えている」とさえ語っていた。「i-phoneはメールの操作性については不十分」だが、「メールを使わなくなった現状を考えるとそれで問題ない」のだという。

その意味では、「情緒的コミュニケーション」は若者に特徴的な携帯電話の利用スタイルであるという捉え方ができるようにも思われる。例えば、ハヴィガースト (Havighurst, 1953) も、児童期から青年期にかけての「発達課題 (developmental task)」である社会性や独立性の発達においては仲間集団の役割が重要になってくると指摘しているが、青年期は「情緒的コミュニケーション」に関する試行錯誤が最も活発に行われる時期であると考えられる。2005年調査時期に被験者が属した青年期は、自己形成、対人関係、知的活動などの面で様々な変化と葛藤を経験する期間であり、その時代を終えることによって、携帯電話利用スタイルにも「情緒的コミュニケーション」偏重からの脱却が生じたという解釈ができるというわけである。

しかし、メールを中心とした「情緒的コミュニケーション」は、若者世代特有の現象というわけではなく、上記の仮説に収斂させるのは不十分であろう。むしろ、これらの発達段階的要因が少なからず存在するとしても、2005年調査で指摘したように「情緒的コミュニケーション」の展開を促す社会的要因（「ライフスタイルの変化」「文化的要因」「所属集団の変更」）が強く関係していると考えerるほうが妥当ではないかと思われる。

例えば、就職等に伴う「ライフスタイルの変化」が影響を及ぼしているという可能性は大きい。2005年調査では、被験者に影響を及ぼしていた「ライフスタイルの変化」として、一人暮らしの「孤独感」や、大学で経験する

「喪失感」、そして将来への「不安」が見出された。しかし、これらの変化は大学卒業時にも同様に生じるとは限らない。新たな「ライフスタイルの変化」は、必ずしも「情緒的コミュニケーション」を促進する要因にはならず、むしろ「情緒的コミュニケーション」を抑制するように働いた可能性もある。例えば、就職等によって生じた自身の社会的役割の自覚や時間感覚の変化が挙げられる。「今は仕事で忙しい」「隙間の時間がない」「学生時代は暇だった」というコメントからも分かるように、就職等による生活時間の変化は、学生時代に存在していた時間的余裕の劇的な減少を意味する。学生時代と異なり「会社から帰って長電話することはない」のは、社会的責任が伴う行動に割かれる時間の増大が認識されているからだと考えられるのである。そして、それらが「孤独感」「喪失感」「不安」を凌駕する性質のものであるならば、「ライフスタイルの変化」に伴って「情緒的コミュニケーション」が抑制されることも十分に想定されるのである。

他の社会的要因（「文化的要因」「所属集団の変更」）についても、いくつかの報告を得ることができた。例えば、一年間の留学を経験して帰国した被験者は、携帯電話利用の減少理由を「日本にいた頃の癖が抜けた」ことに帰していた。彼女は、留学中も現地で携帯電話を利用してしたが、メールを主とした「情緒的コミュニケーション」という留学前の「文化的要因」から距離を置いたことで、帰国後は「落ち着いた」利用スタイルを手に入れたのだという。一方、故郷へのUターン就職によって半年前に東京を離れた被験者は、「離れ離れになった大学の友人とのやり取りが増えた」ため、「利用スタイルに大きな変化は生じていない」。「所属集団の変更」は、携帯電話利用を促進する場合もあれば、そうではない場合もある。「会社の同期と仕事の愚痴を話したりする」こともあれば、「会社の人と番号・アドレスを交換することはない」というケースもある。新しく所属した集団の成員に「情緒的コミュニケーション」を求めないのであれば、以前の仲間集団とのコミュニケーションが継続する可能性は高く、「所属集団の変更」が「情緒的コミュニケーション」を促進しないこともあり得る。実際に「利用スタイルに大きな変化は生じていない」と語った被験者は、「職場の人間関係で携帯電話を利用することはない」のだという。

## (2) 対人関係の選択と親密化

2005年調査では、対人関係の選択と親密化という人間の普遍的なコミュニケーションにおける携帯電話の役割を詳細に描いてきた。「中心的対人関係」を築いていく相手を見付け、対人関係を親密化させていくというプロセスにおいて、携帯電話は一定の役割を担っている。

2005年調査でも見たように、深い関係性を築き上げた「中心的対人関係」は、将来にわたって継続展開する可能性が高い。しかし、大勢の「周辺の対人関係」は大学卒業と同時に関係が消失するのであり、次のステージにおける「周辺の対人関係」の培地となっていく。同じ青春時代を過ごした固定的な「中心的対人関係」が生涯の友人になっていく可能性がある一方で、大勢の「周辺の対人関係」は流動的に入れ替わっていくのである。

被験者たちの報告を見ても、大学時代の親しい友人とは「定期的に会う」「長電話をする」「一緒に遊びに行く」ようである。一方で、「継続している強い関係はない」「関係の浅かった人とはコンタクトが全滅」というケースもある。留学から帰国した被験者も「(所属学年が変わったことで)友だちは減った」という。つまり、彼らは「情緒的コミュニケーション」に関わる対人関係の選択と再構築を経験していると見ることができる。

そのような状況で、全ての被験者が「例外」として語るのが、恋人の存在である。「携帯電話利用が減少した」と語る被験者も「恋人との関係においてのみ(料金・時間)は増大」「恋人に対しての電話・メールは突出」と例外を認めている。海外との遠距離恋愛を経験した被験者は、国際電話料金が月6万円以上かかった事実を報告した。また、恋人と同棲中の被験者は、「帰宅コール」や日常的な携帯メールのやり取りも含め、常に相手とコンタクトがある状態にあるという。さらに、事業者が提供する料金プランを巧みに利用して、通話料金を抑える努力をしている被験者も見られた。普段利用している携帯電話とは別の「恋人専用」の電話を所有して、両者を効率的に使い分けているのだという。

2005年調査では、「中心的対人関係」を築いていく相手を見付け、その親密化を図っていくという姿は、普遍的なコミュニケーション現象であり、携帯電話社会においても同じであるという議論を展開してきた。携帯電話が対人関係の展開のスピードや深淺に影響を及ぼしている可能性は否定できないが、自分自身が関係を深めていくことのできる友人や恋人を選択していくと

いう流れは、大学卒業後に強くなっているように思われる。それは、対人関係の選択と親密化という普遍的現象を背景にして展開されていることを示す同時に、若者に特徴的な携帯電話利用スタイルが必ずしも永続しないことを示唆しているのである。

#### 4. 最後に

被験者が少なく、これらの知見を一般化できないという2005年調査の限界は、追跡調査でも共有されている。しかし、少人数のインタビュー調査という質的側面を重視した研究方法によって見えてくる側面は必ずしも過小評価すべきではない。少なくとも、携帯電話と対人関係についての議論は十分な調査研究の上で展開される必要があり、本調査のような実態調査は今後の調査研究の出発点としての意義を有していると考ええる。その意味においては、2005年調査および追跡調査で発見されたライフステージと携帯電話利用との関わりについての仮説、そして携帯電話と対人関係に関する仮説は、様々な観点から精緻化される必要があり、またそれらを検証していく必要がある。

本稿では、ライフステージの変遷に伴って携帯電話利用のスタイルにも変化が生じる可能性を指摘した。これは、これまで携帯電話利用調査の対象となってきた若者の利用スタイルが特異であるという議論につながる。現在の携帯電話利用者は、大学生だけでなく、小学生から高齢者にわたるまで幅広い。その意味においては、より幅広い集団からデータを収集して、実態把握を蓄積していく作業が求められていると言える。さらに、集団間、世代間、そして文化間の利用スタイルの違いを調べることも可能であろう。それによって携帯電話利用の文化的側面と心理的側面を切り分け、このメディアをどのように利用していくかという議論につなげていくことが必要だと思われる。

#### 【引用文献】

- 新井克弥・岩佐淳一・守弘仁志（1993）「虚構としての新人類論——実証データからの批判的検討」小谷敏『若者論を読む』世界思想社，pp. 204-230.
- 浅野智彦（1999）「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之『みんなほっちの世界——若者たちの東京・神戸90's・展開編』恒星社厚生閣，pp. 41-57.

小寺 敦之

- 橋元良明 (1998) 「パーソナルメディアとコミュニケーション行動——青少年にみる影響を中心に」 竹内郁郎・児島和人・橋元良明『メディア・コミュニケーション論』北樹出版, pp. 117-138.
- (1999) 「コミュニケーション変容—通信メディア新時代におけるコミュニケーション行動の変化を探る」東京 大学社会情報研究所編『社会情報学Ⅱ——メディア』東京大学出版会, pp. 107-129.
- Havighurst, R. (1953), *Human Development and Education*, New York, Longmans, Green & Co., INC. (R. ハヴィガースト『人間の発達課題と教育』 荘司雅子監訳, 玉川大学出版部, 1995年)
- 小寺敦之 (2007a) 「携帯電話利用の社会的・心理的背景に関する研究—質的アプローチによる『利用と満足研究』の試み」博士論文 (上智大学)
- (2007b) 「もしも携帯がなかったら—携帯電話の機能的側面に関する研究」モバイル学会シンポジウム「モバイル2007」研究論文集: 83-88.
- 松田美佐 (2000) 「若者の友人関係と携帯電話利用——関係希薄化論から選択的関係論へ」『社会情報学研究』4: 111-122.
- 斎藤嘉孝 (2005) 「家族コミュニケーションと情報機器——小中学生とその親における携帯電話の使用状況」『情報通信学会誌』23 (2): 61-68.
- 田村毅 (1998) 「高校生のメディア利用と対人関係能力」『東京学芸大学紀要 第I部門 教育科学』49: 229-238.
- 富田英典 (1997) 「インティメイト・ストレンジャーの時代」富田英典他『ポケベル・ケータイ主義!』ジャストシステム, pp. 14-30.
- 辻大介 (1999) 「若者のコミュニケーション変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版, pp. 11-27.
- 辻泉 (2003) 「携帯電話を元にした拡大パーソナル・ネットワーク調査の試み——若者の友人関係を中心に」『社会情報学研究』7: 97-111.
- 吉井博明 (1997) 「携帯電話、PHS普及の社会的意味」『郵政研究所月報』106: 92-97.